
バジリコ×バジル

まごひげ

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

バジリコ × バジル

【Zコード】

Z9219E

【作者名】

まいひげ

【あらすじ】

そこは、終わったはずのモノがまだ始まつたばかりの世界空は鈍く雨が絶えず降り、ゴミのように散つてゆく——僕たちはこの世界からの大脱出を決めたんだ。

工場にて（前書き）

アドバイス下さい
感想でもいいです

工場にて

くもりといつて云が少なく、はれと云つては云が多い
半端な空・・・。

灰色で縁取られた四角い空

ここは、どこか現実の世界の奥の奥。
もしかしたらもっと奥かもしれない

古びた造船工場・・・。

錆びたトタン壁にポツリポツリとしづくが落ち始めた頃、

「雨降ってきた！ 急いで！！」

屋根の上に居る少年に、長い黒髪をおさげにした少女は
朽ちた梯子を持ちながら周りを伺つた。

「だつてまだ終わつてないって・・・」

少年は、釘をくわえながら下にいる少女に言つた。

冷たい追い打ちは次第に大粒の雨となり少年の作業を遅らせた。

ガンガンガンガン・・・

トタンに釘を打ち付ける作業は単純だが逆に飽きやすいのが
現実だった。

大粒の雨は風と混ざり更に追い討ちをかけてくる。

「なんでこんなことになつたんだつけ！？。」

少年は絶やすことなく釘を打ち付けた。

「もとを言えば全部あんたが悪いのよーー！」

雨は少女の服を殴り黒髪をえぐった。

赤と蒼と翠と灰色の空と風景の時間。

事件は起こつた。

「スイマセン、、、」

時計の針は午前10時を指していた。

「完全集合は午前8時のはずだぞ」

大きな男は腕組みをして少年をにらみつけていた。

男の後ろでは少年と同じぐらいの子供がせつせと持ち場の作業をこなしながらもクスクス・・・と笑い声が絶えなかつた。

「1156号！聞いているのか？？！」

大きな怒鳴り声がトタン造りの工場全体に広がつた

「君の代わりなんざいいくらでもいるんだぞ！！

時間に遅れることは、死罪に匹敵する

「ハイ。」

少年は一生名前で呼ばれることはない。

それは死んでからもこれからも・・・・。

一人の人として認められていない。

【モノ】として一種の道具として扱われる。

「さあ行くぞ1156号」

男は少年の細い手首を握り歩きだした。

継ぎ接ぎだらけの鈍色の床。

少年の視線の先に向こうつ

赤い服を着た少女が一人。

「待ってください」

声は震えていたがその声は透き通るよつにキレイでまっすぐに聞こえた。

「なんだね？ 1201号」

沈黙が続いたのち少女は重い口を開いた。

「死罪はあんまりだと思います。それに毎日毎日、朝早くから夜遅くまで働いているのだから遅刻だつてします！」

少女は紅い眼に涙を浮かべながら男に訴えた。

「1201号私に口答えする気か？ 君も死罪だ！」
男は少女に近寄る。

静まり返る工場内。

屋根裏の扇風機だけが相変わらずカタカタと陽気に回っていた。

「おーい！ こここの屋根がめくれてあるよ誰か

直してはくれまいかな」

工場の向こうからかすれた声のおじいさんの声が聞こえた。

姿は見えない。

音声だけの声だった。

空は「ローロー」と喉を鳴らし闇色の雲が辺りを覆つた。

「はつはいー長官、じつらがやります。少々お待ちを」

男は大きいくせにペロリとお辞儀すると少年と少女の背中

を押してこう言った。

「命拾いしたなクズども・・・」

2人は黙つて歩きだした。

工場の外に出たとたん少年は視線を合わさずには少女に言った。

「あれ、魔法だろう？」
冷たい風が頬を滑った。

「そうだけどそうじゃないわ」

蒼い草を踏みながら行く先はもちろん壊れた屋根。

「嘘じやないのか？」

「嘘、だけど嘘じやないわ」

朽ちた梯子を屋根に立てかけ少年を促す
少年は不思議そうに梯子を上がっていく。
そこには、さつきおじいさんが言っていたように本当に
トタンがめぐれていった。

「デタラメ言つていたんじやなかつたのか。。。」

トタンの上は足場が悪くめぐれたトタンは風化によるもの
だった。

この下はさつきの子供たちが作業をこなしている。

戦争。

魚雷。

造るために。

そして何より勝つために。

トタン屋根の割れた隙間からもれる黒い煙とホコリ、熱風
は子供たちの働く環境を物語ついていた。

「ちよつとーー早く修理しなさいよー見つかるよ芝ーー」
大きい声だけど小さい声で言った。

「ういー

少年は鋸びた釘を口元へわえてトンカチを片手に屋根直しを
し始めた。

「おおー君たちは良く私がしてほしかったことが分かつたなー！」
さつきのおじいさんの声だ。

屋根の下。

かされた声。

「光栄です。長官、私たちは時間に遅れた罰を受けている
までです」

少女はひざまづいて頭を下げる。

「また1156号か・・・」

溜息をつくおじいさん。いや長官と言つた方が良いだらうか。

後書き

上手くかけないけれど私のオリジナル作品の第一作です。
バジルコ×バジルを読んで下さった方は
これからアドバイスや感想をお願いします。

ある時代の物語

その日は、偉く蒸し暑くいつ頃からか雲もドンよりしていた。
そんなめんどくさい昼下がり

全国の奥様はお昼のワイドショーを横になりながら見ている時間帯
だろうか

四角い視界を横切るようにお世辞にも綺麗とは言えない禿げた墨
色の飛行機が5・6台
飛びのが見えた。

何となくぼんやりしていた。

2畳半ほどの個室の中には麻袋が2枚ほど置いてあった。まる
でこれで寝ると言っているかのように
ステンレスの粗末なボウルにはフランスパンが3枚、4枚目は食
べかけだ

無論、彼はあるの後死罪は免れたものの牢屋行きとなつたのだった。
そして、彼が考えることはただ一つ

「2時までにはこじからないと午後の仕事に間に合わなくなつて
しまう」
逃げる事だった。

平和が確立した世界で何故戦争をするのだろうか
それは、平和を維持し人類の戦意によるボルテージを下げるために
戦争をする

すれば戦意が下がりまた平和が訪れる。平和が来ると不満が高まる。

で、戦争する。

抑制と均衡の関係とはまさにこのことであらう。

この抑制と均衡の関係は天秤がピタリと止まるように釣り合ひがとれていなければ

そのバランスが崩れぐちゃぐちゃになってしまつ。

そのことで最近まで国の大統領や国会委員らが混じつて話し合つた結果、こんな法律が新しく生み出された。

【平和維持バジリ「抑制均衡法】

と言つモノだつた。

内容はさつき言つたよつに平和と戦争のバランスを取るための法律だ。

片方の国は翠豊な山々が在り一面の青い空が一日の始まりを告げる。が、しかしもう片方の国は片方の国の平和のバランスを取るために戦い

続けねばならないんだ。

あまりにも不公平なこの法律は国民には何の承諾も得ず執行されたのだった。

過去に人間と魔法使いとの戦争が繰り広げられた頃、最先端のテクノロジーと技術をふんだんに用いた人間はみごとな戦術で魔法使いに勝つた。

【平和維持バジリ「抑制均衡法】が出来たのはそれからずっと後のことだつたが

戦争に勝つた人間は魔法使いを道具のように扱つよつになつた。

そんな昔からの概念が根づいたのだろうか戦争をし続ける国は魔法

使いの国（魔界）になった。

そして法律の名前の影響からか、戦争をし続けるかわいそつな国、誰もが バジリコと呼ぶようになったのだ。

戦争をするのは決まって魔法使いで（魔界戦争）人間は指揮を取り今朝寝坊した少年を叱った大男も人間で逆を言つと造船工場で働いていた子供たちは皆魔法使いの子マジックチルドレンで誰もが貧しくいつも腹を空かせていた。

ついでに言つと彼らには、名前が無く番号で呼ばれるようになったのも法律が出来てからのことだった。

法律ができる前はチャンとしたナマエがあった。

だが、この世界になつてからナマエを使えなくなつた。すべて番号「おい、2時からの作業の時間だ。出番」朝見た大男が鉄の輪に通してある鍵の一つを取り出してガシャツと大きな音をたてながら牢屋を開けた。

少年は無言で出口を潜ると男は鍵をかけ直して歩き出した。暗い石畳を歩くと「シンシン」と音がする。その場の沈黙を消してくれるようなその場のBGMだった。

短い階段を上ると眩しい太陽の光ではなくどんよりした雲が出迎えてくれた。

上まで上がりきると男は歩くスピードを速めて少年を引き離した。

「ここまで来れば工場まで一人で行けるだろ。もつ頬も何百年と

魔界にいるのだから

そろそろこの生活にも慣れてもらわなきゃ困るや

「・・・・ハイ」

魔法使いは年を取らない

と言つても人生のどこからかで止めるかは自分で決めることが出来る。

20歳がいいなれば20で止められ、おばあちやんになつてから
だつて止められる

時間が止まるのは自分の身体であつて外の世界の時間はそのまま

時間が止まつていても外部からの損傷には考慮せず
死ぬことだつてありえる

ここで働く子供は時間を止めている。

労働者として

反対側の世界の平和を維持する為だけに・・・。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとっています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n9219e/>

バジリコ×バジル

2010年10月22日00時07分発行